

# 研究員 の眼

## 注目高まるリビング・ラボ (Living Lab)

～『鎌倉リビング・ラボ』の始動

生活研究部 主任研究員 前田 展弘  
(東京大学高齢社会総合研究機構 客員研究員)  
(03)3512-1815 maeda@nli-research.co.jp

2016年11月より、筆者も所属する東京大学高齢社会総合研究機構が中心となって『リビング・ラボ (Living Lab)』という“新しい地域活動 (イノベーション活動)”を開始させた<sup>1</sup>。場所は鎌倉市の北部に位置する今泉台地域<sup>2</sup>である。世界では約400のリビング・ラボが存在しているが、日本で確認できるリビング・ラボはまだ10にも満たない程度である。しかしながら近年、数多くの企業がリビング・ラボに関心を寄せてきている<sup>3</sup>。そこで改めて「リビング・ラボとは何か」、また「鎌倉リビング・ラボ」の状況について紹介したい。

リビング・ラボは、一言では「住民 (ユーザー・当事者・生活者) と企業や自治体、大学・研究機関等の関係者が “共創” する場 (活動)」のことを指す。基本的な活動は、「テストベッド (TEST BED)」と呼ばれる活動の拠点があり、そこで、いわゆるP D C A [Plan (計画) → Do (実行) → Check (評価) → Act (改善)]のサイクルを継続的 (反復的) に回しながら、商品サービスの開発・改善や地域課題の解決に向けた取組みを住民と共創していく。リビング・ラボに詳しい安岡氏<sup>4</sup>の言葉を借りると、「技術を社会に大規模導入する前に、実際に生活の場やそれに近い形で、関係各所を巻き込んで使ってみよう、使い込んでみよう、そして改良してみよう。そしてそれを満足するまで繰り返し、トコトン最上の形を追い求めようという反復のイノベーションの試み」がリビング・ラボとされる。従来のオープン・イノベーションの活動に比べれば、リビング・ラボは地域に常設されていることにより、テーマに応じて求められる人 (当事者) を集めやすいこと、また活動を反復させる面で効率的であること、さらに当事者と共創することで生活者の満足度の高い成果の創出が期待されることが特徴であり強みと考えられている。

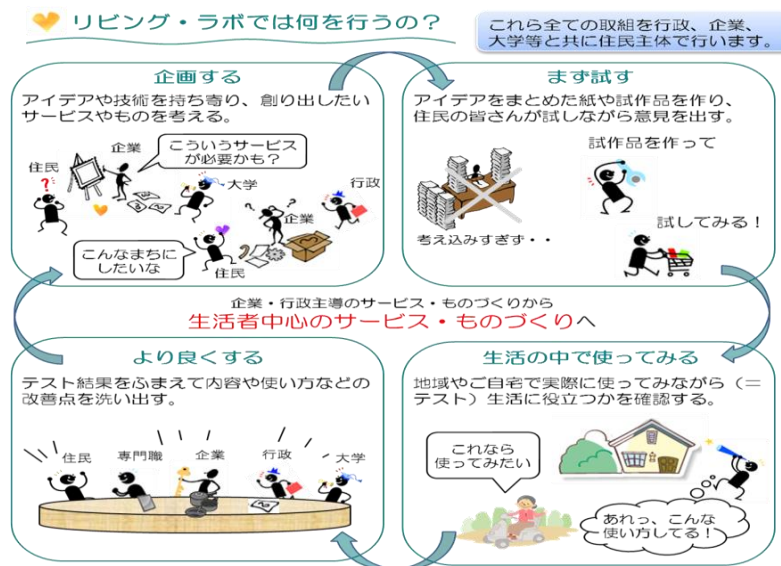
<sup>1</sup> 前田展弘「日本版 Living Lab の探究～新たな事業開発／社会参加の形」(ニッセイ基礎研・研究員の眼、2014.12.15)

<sup>2</sup> 約2100世帯、5140人在住、高齢化率45%(2016年12月現在)

<sup>3</sup> 筆者が運営する東京大学産学連携組織ジェロントロジー・ネットワーク内設置の「リビング・ラボ研究会」に参加する企業が近年増加の一途にある(現在36社が参加)

<sup>4</sup> 安岡美佳(コペンハーゲンIT大学 准教授)

図表 1 : リビング・ラボの活動イメージ



資料：「鎌倉リビング・ラボ」住民説明資料より

では、ジェロントロジー（高齢社会総合研究）を推進する東京大学高齢社会総合研究機構が、なぜリビング・ラボの活動を開始したのか。それは、**高齢者の生活実態とニーズを改めて生活現場の中で当事者と向き合いながら追究していくこと**に狙いがある。通常のアンケート調査などだけでは捉えきれない**高齢者の真の声をリビング・ラボの活動を通じて聞くこと（聞き続けていくこと）**を企図している。筆者もよく企業関係者から、「高齢者のニーズは何か、何に困っているのか」、イノベーションにつながる情報（ヒント）を尋ねられることが少なくないが、当事者に直接聞いて、その声を五感で感じる事が最も望ましいことは言うまでもない。**高齢者の暮らしの質を高める手段、また企業の高齢化に対応したイノベーション活動を推進する**意味でもリビング・ラボは期待されるのである。

このような趣旨から、鎌倉市（今泉台地域）を舞台とした「鎌倉リビング・ラボ」をスタートさせたわけであるが、その第1回目の活動は、「医薬品パッケージ」に関するテスト<sup>5</sup>とニーズ調査を行った。経緯については割愛するが、ベルギーに拠点を置く製薬会社から、「これから日本をはじめとするアジアへの進出をはかるにあたって日本人の意識などを調査したい」との依頼を受けて行ったものである。鎌倉市役所及び今泉台町内会、また現地のNPO<sup>6</sup>の協力により、リクエストに合う男女年齢の住民の方と薬剤師の方（計32名）に集まっておこなった。参加者には一定の謝礼（報酬）を支払う。参加者に振り返っての感想を聞くと、「**自分たちの意見がこれから開発される商品やサービスに反映されることに意義と魅力を感じる**」といった声を聞くことができた。

今後も継続的な活動を進めていくが、すでに複数の企業から開発中の商品サービス等について、鎌倉リビング・ラボで共創していきたいとの話をいただいている。例えば、①定年後世代の在宅勤務家具の開発、②パーソナルケア製品の実証（女性用シャンプー他）、③高齢者のヘルスケア・予防に向け

<sup>5</sup> ユーザビリティ・テスト

<sup>6</sup> NPO タウンサポート鎌倉今泉台

た方策の検討、④次世代モビリティのニーズ調査・試乗調査、⑤生活支援ロボットのユーザビリティテスト、⑥専用タブレットを活用した高齢者向け生活サポートサービス調査などである。

それぞれの企業関係者と話をすると、「開発している商品サービスが本当に生活者（高齢者）にとって使い勝手がいいのか、単発の調査だけでは不安であった」、「販売に踏み切るためには一定期間試用したエビデンスが必要だったが、それを行う場所（対象）が見つからなかったのでありがたい」といった声を聞く。「本当にこれでいいのかと不安を抱えながら開発に携わっている企業関係者は少ないと想像する。そうした企業関係者と住民（ユーザー・当事者・生活者）他をつなぎ合わせるリビング・ラボは、企業にとってのイノベーション活動、また住民が参加する地域活動に新たな風をもたらす存在になっていくのではないかと考える。

筆者としても鎌倉リビング・ラボの活動を充実させながら、高齢者の暮らしの改善、また企業のイノベーション活動に貢献していきたいと考えている。

